

Title	VEGETABLES IN NEPAL(Abstract_要旨)
Author(s)	Kurita, Masakazu
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1970-01-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/213291
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【 255 】

氏名	栗田匡一 くり た まさ かず
学位の種類	農学博士
学位記番号	論農博第251号
学位授与の日付	昭和45年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	VEGETABLES IN NEPAL (ネパールの蔬菜)

論文調査委員 (主査) 教授 塚本洋太郎 教授 小林 章 教授 長谷川 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はネパールのそ菜を研究したものである。発展途上の諸国の中でもネパールは開発の遅れた国として知られ、その産業の調査・研究も緒についたばかりである。著者はネパールを二度たずね、長期間にわたり農業の実態を調べ、実験農場の設置・指導を通じて、そ菜の栽培を研究し、日本から送られたそ菜品種の適応性を調べている。

ネパールの普通そ菜の種類はきわめて少なく、首都カトマンズの市場で見られるものも40種あまりで、山村部に入ると30種以下になる。これらの中には熱帯地方に限られて利用されている10数種が含まれ、いずれも品質はきわめて低い。また、そ菜として利用される野草は約20種あるが、これらを加えても日本のそ菜の種類数約140にくらべるとはるかに少ない。種類数と品質の貧弱さは乾期の終り頃になるとはなはだしくなり、それがネパール人のビタミン不足の原因となっている。したがって、ネパールのそ菜生産は国民保健の立場から見ても重要問題である。まだそ菜専業農家は少なく、首都付近にわずかに見られるだけである。

国内全体に最も普及度の高いそ菜はキュウリで、つぎにダイコン、ジャガイモ、カボチャなどが続くが、ニンジンほとんど見られない程度である。地域ごとに種類がちがっており、栽培法にも差異がみられるが、生産力は一般に低い。日本で育種されたそ菜品種をネパールに導入して在来品種と比較・栽培すると明らかに日本品種の生産力は高く、適応性も強い。

以上のようにネパールのそ菜生産の現況はきわめて低調であるが、その改良は可能であることを示唆している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

発展途上の諸国中、ネパールは開発が遅れ、近年に到って注目されるようになったが、その文化・産業の調査・研究はきわめて少ない。著者は二回ネパールを訪れ、国内を広く踏査し、農業の実態を明らかに

している。この論文はとくにそ菜の研究をまとめたもので、ネパールのそ菜研究としては世界で最初の業績であり、価値の高いものと考えられる。

著者の研究によると、ネパールの普通そ菜の種類は非常に少なく、首都の市場に現われるものを調べても40数種にすぎず、日本のそ菜の種類数約140にくらべるとはるかに少ない。それらの生産も低調で、そ菜として利用されている野草約20種を加えても、なお非常に不足している。これがビタミン欠乏による病気の原因となっている。ネパール原産のキュウリは最もよく普及し、ダイコン、ジャガイモ、カボチャなどがそれに続き、ニンジンほとんど見られない程度である。

著者は三つの主要地域におけるそ菜の種類と栽培法の特徴、環境とくに土壌の理化学性を調べ、さらに日本で育種された数種のそ菜品種を現地で試作しているが、日本品種はよく適応し、ネパール在来品種に比して高い生産力を示したことを見ている。これらの調査と試験の結果から、ネパールのそ菜生産に対する振興策を示唆している。

このようにこの研究は、ネパールのそ菜生産の実態を明らかにし、発展途上国の産業に貢献するところが大きく、園芸学上の価値も高い。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。